

秀賞

みそ汁がくれたエネルギー

岩手県一関市立一関東中学校

2年 千葉 心遥

「なんか作っというたほういい？」

総合文化部の活動を終え帰宅後、母のスマホにタブレットからメッセージを送る。「ありがとう。冷蔵庫にあるもので、みそ汁を作ってくると助かる」と母からの返事。

早速冷蔵庫の野菜室を開け、材料を確認した。大根、玉ねぎ、にんじん、じゃがいも…「そうだ！ 具たくさんみそ汁にしよう！」そこから私のみそ汁づくりが始まる。野菜の皮をむき、食べやすい大きさに切る。玉ねぎを切るのは目の痛みと涙との闘いだ。痛みを耐えながら薄切りにしていく。鍋に水とだしの素を入れて沸騰させ、切った野菜を入れる。火力は中火。ぐつぐつと煮える音、野菜の煮える香りがキッチンいっぱいにひろがる。お玉でじゃがいも一つを取り出し菜箸でそっと刺してみる。スッと菜箸がじゃがいもを通過した。「よし！」野菜が煮えたサインだ。火を止め、みそをお玉に少なめに取り、菜箸で少しずつ溶かしながら入れる。鍋から見える野菜は、みそで見えなくなった。小皿に汁を少し取り味見をしてみる。

「うん。みそを少なめにしたけど、思ったよりおいしくできた！」あとは父、母、弟の帰りを待つばかりだ。

父は小学校の事務職員、母は中学校の養護教諭をしている。小学生までは弟と放課後児童クラブで親が迎えに来るまで過ごしていたが、中学生になってからは私の帰宅が一番早くなった。「心遥が一番早く帰ってくるし、小学校の家庭科で習ったものでいいからなんか作れる？」と母の一言から私の夕食づくりがスタートした。初めて作ったのはほうれん草とコーンのソテー。1束のほうれん草を炒めたら、かさがかなり減ってしまった。4人家族で4等分にしたら一人分がとても少なくなってしまうが、それでも家族は「これ心遥が作ったの？すごい」や「おいしい」と言いながら食べてくれた。私は家族の役に立てたことが少し誇らしかった。心の中がじんわり温かくなった。少しだけ「大変だな、一人で料理できるかな？」と感じた気持ちもどこかへ吹き飛んでいた。「おいしい、すごい、助かる」の言葉をもっと聞きたい。中学校の生活がスタートしてまだ慣れない中だったが、そんな疲れも吹き飛ばすほど元気が出る夕食だったことを覚えている。

みそ汁が出来上がって間もなく、父が児童クラブから弟を連れて帰ってきた。

「なんかいいにおいがする！」と続いて母が帰宅。母はとてつもないスピードで野菜炒めを作る。私が作ったみそ汁、母が作った野菜炒め、朝炊いたご飯をレンジで温めて、あっという間に夕食が完成した。「今日のみそ汁、ちょっと味が薄いかも」と私。「野菜からだしが出ていてすごくおいしい」と父。「娘に作ってもらうなんて幸せだなあ」と母。「お姉ちゃんすごい」といつもは生意気な弟。薄味かもと心配な気持ちとは真逆に家族はおいしそうにみそ汁を食べてくれている。私はほうれん草のソテーを作った時と同じような、じんわりとした温かい気持ちになった。いつもと変わらない夕食なのに、どうしてこんなに元気が出るのかと思った。みそ汁の温かさが心にまで伝わっている気がした。私は、みそ汁の入った器を見つめて考えた。そして気づいた。

「このみそ汁には家族も自分も元気になるエネルギーが詰まっているんだ」両親の「おいしい、助かる、ありがとう」の言葉。弟の空っぽになった器。それらが私の心にエネルギーをくれるし家族の役に立ったという気持ちが、自分の心を満たしエネルギーになるのだ。きっとこのみそ汁を自分一人で食べたらここまでおいしく感じないだろうし、家族が私のみそ汁について何も言ってくれなかったら心がこんなに温かく、エネルギーで満たされることはないだろう。もう一つ気づいたことがある。私は、私を支えてくれる周りの人たちに感謝の言葉を伝えられていたのだろうか。朝食を食べ、登校し、部活をして、帰宅する。当たり前のように過ごしている毎日も、両親をはじめ先生方や友人など私を支えてくれる人がいるから成り立っている。私は、私を支えている人たちにエネルギーを与えることができただろうか。私を支えている人たちからエネルギーをもらうことの方が多いのではないか。自分の心がじんわりと温かくなったように私も周りの人にエネルギーを与えたい。そのために感謝の気持ちを言葉で素直に伝えることを心掛けたと思った。

夕食を食べ終わって両親に「いつもありがとう」という言葉を伝えたくなった。でもなんだか照れくさくて、恥ずかしい。私はいつもありがとうの代わりにこう伝えた。

「明日もなんか作るね！」

私は明日もみそ汁を作る。家族みんなの心も体もエネルギーで満たされるように……。